

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520086

研究課題名(和文) イエスの神義論：聖書学的アプローチと組織神学への答え

研究課題名(英文) Jesus' theodicy: an biblical study approach and answer to the systematic theology

研究代表者

本多 峰子 (Honda, Mineko)

二松學舎大學・国際政治経済学部・教授

研究者番号：00229262

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：福音書のイエスはこの世になぜ悪があるのか、との問題についての神義論は論じていないが、終始悪の問題に実践的に取り組んでいた。彼は神が人々に救いを差出していることを示した。救いは罪、病、貧困等人生のあらゆる面に及ぶ。申命記的応報思想では、苦難は罪の罰と見られる傾向があったが、イエスによれば、神は苦しむ人をこそ憐れみ救う。イエスの思想は法的義を凌駕する神の義を信じる伝統にある。その義はアブラハムとその子孫に祝福を誓った神の信義である。イエスは、人も神の救いと救いに応答して相互の救いと助けにより神の救いの業に参与しこの地に神の国を成就するべく招く。イエスの示す神の義は思索ではなく能動的行為で証される。

研究成果の概要(英文)：Although Jesus in the Gospels does not discuss theodicy as to why there is evil in the world, his whole ministry is active fight against evil. He shows God is offering salvation to the people from all their sufferings: from their sins, diseases and poverty. According to the prevalent Deuteronomistic idea of retribution, sufferers are tended to be seen as being punished for some sins. Yet, Jesus shows that God has compassion on those who are suffering and saves them. In thinking thus, Jesus is in the tradition of believing in God's righteousness to keep His promise of blessing to Abraham and his offspring, believing it as surpassing His legal justice. Jesus calls us to participate in God's saving act by helping and forgiving each other, thereby realizing God's kingdom on earth. The righteousness of God Jesus shows us is proved to be true by actively fighting against evil, not by speculation about the logical problem of evil in the world which is created by a good almighty God.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教学 キリスト教 倫理学 西洋古典 思想史

1. 研究開始当初の背景

本研究の契機は、組織神学の神義論との取り組みのうちに気づかれた三つの難点にある。その第一は、今日の組織神学の神義論の行き詰まりである。組織神学の神義論は特に「なぜ全能かつ善である神の被造世界に悪が存在するのか」との問いとして問われ、20世紀のホロコースト後の欧米において神の存在や本質に関わる問いとして、真剣に論じられている。目下、悪の存在を人間の自由意志の濫用に帰す理論（アウグスティヌス型）、成長の糧と見る理論（エイレナイオス型）、神の〈全能〉の意味を問い直すプロセス神学の神義論などがある。しかし満足な結果は出ておらず、組織神学の内部でも結局、「神の責任は、神が究極的にはわれわれの生き、動き、存在する限界を定めたという事実にある」（J.K.ロス）という認識に合意が見られる。神義論は、論理的に悪の存在を説明しようとするだけでは足りず、悪の存在に対して神が何をなしたか、何をなすかという、救済論や悪との戦いの問題を視野に入れずには答えが出ないとの意見が、ポール・リクールやエマニュエル・レヴィナスなどの研究者から出されているのが今日の現状である。第二は、「神義論」として論じられている問題が聖書学と組織神学とで異なり、聖書学では悪の存在そのものよりもむしろ、神の民であるイスラエルの苦難や、義人の苦難が問題にされ、聖書学と組織神学両分野の神義論が有機的に結びついていないことである。第三に、現在の組織神学での神義論は、ほとんどイエスという人物に言及していない。キリスト教の原点であるイエス抜きで語られる神義論がこの宗教の回答として満足でありえるか、疑問に思われた。

2. 研究の目的

上に述べた状況から、本研究においては聖

書にもどり、そこから読み取れる限り正確に悪と苦難の問題に対するイエスの思想態度を聖書学的に明らかにすることを第一の大きな目的とした。そして、その結論を組織神学と関連させて、組織神学にとっても意味のある回答を見出すことが第二の目的であった。

3. 研究の方法

組織神学の限界を超えるため、歴史的方法をとり、生前のイエスに焦点を当てた。資料としては、福音書を中心に、二資料仮説に従って、共観福音書の場合にはマルコによる福音書を最優先し、マタイ、ルカ、ヨハネの特殊資料、その他Q資料等も考慮に入れて論じた。背景として、旧約聖書、中間時代の新約聖書外典、ヘレニズム世界の奇跡伝承、タルムードなどのユダヤ教文献も用いた。最終年度は組織神学の神義論についての特に近年の論考を研究書、海外雑誌を中心に参照しつつ、今日の神義論に対してイエスの思想の持つ意味を論考した。資料の入手は計画通り、東京大学、日本聖書神学校、インターネット上での論文の入手など、国内で入手可能な参考図書は国内で閲覧あるいは購入し、それ以外は平成22年度、23年度、24年度の夏期休暇中に英国ケンブリッジ大学図書館およびティンダルハウス図書館で閲覧、複写を行った。

4. 研究成果

以下のような330頁 279744文字の論考を、「イエスの神義論 イエスの神義論：聖書学的アプローチと組織神学への答え」との題で執筆した。この論考の一部は本研究から枝分かれして現在執筆中の東京大学総合文化研究所地域文化研究専攻分野の博士論文「共観福音書の神義論 マルコによる福音書を中心に」の重要な部分と重なるが、イエ

スの神義論は、それ自体、社会的意味が共観福音書の神義論よりも大きいので、これはこれでいつか出版できればと考えている。

本論の章立てと結論は、以下の通りである。

序文 問題の所在、 I 章 悪の問題と神の義 思想史的背景 (1 悪の起源と悪の本質についての理解、2「神の義」の概念、3 禍を下すのは神か?、4 恩寵と応報の緊張、5 病と穢れの問題、6 悪霊とサタン、7 貧者、弱者の存在と神の義、8 死後の報いの概念の発達、9 悪と罪の問題についての小結論) 2 章 神の同情 (1 序 問題の所在と本章の目的、2 splanchnizomai の字義的意味 eleeo、oiktiro、3 福音書における「憐れみ」、4 インマヌエルなる救い主、5 本章の結論) 3 章 罪と赦しの問題 (1 序、2 罪人とは誰か、3 イエスの譬えにおける罪と赦しの問題、4 本章の結論) 4 章 応答としての行為 (1 序、2 ローマでの奴隷とヘブライ社会での奴隷の性質の違い、3 イエスの譬えにおける奴隷の役割、4 神の「憐れみ」と人間の隣人愛の行為の要請、5 本章の結論) 5 章 病の癒し (1 序、2 イエスの治癒奇跡の伝統的見方 罪の赦し(禍の神義論)-の再考、3 事例分析、4 禍の神義論のアンチテーゼ) 6 章 穢れ (1 序、2 イエスによる穢れの清め) 7 章 サタンからの解放 (1 序、2 事例分析) 8 章 貧しい者への福音 (1 序、2「幸いなるかな貧しい人々は。神の国はあなたがたのものだから。」(ルカ 6:20)、3 神の配慮 (ルカ 12:22-31/マタイ 6:25-33)、4 イエスの譬えにおける裕福な者、貧しい者への使信、5 本章の結論) 結論、参考文献。

この論考の結論は、以下の通りである。

組織神学で問われている神義論の問い、なぜ全能かつ善なる神が創造したこの世界に悪や苦難が存在するのか、との問いにはイエスは答えていない。しかし、それは、彼が悪や苦難の問題に無関心であったからではな

い。イエスの悪と苦難の問題に対する答えは、理由を問う思弁的なものではなく、神が悪や苦難の中にいる民を救うために働いていることを、実際にイエス自身その働き手として行動することで示す能動的なものであった。

イエスの時代の人々は、神の民である彼らがなぜ苦しむのかとの問いに向かい、主として、3 種類の理解をもっていた。第一は、それらの人々が過去に犯した何らかの罪の罰と考える応報思想、すなわち申命記史家の歴史観から導き出されたいわゆる「禍の神義論」と呼べる理解である。これは、禍を人間の責任に帰し、神の正義を法的に擁護する思想である。第二に、重い皮膚病などに関して、それを穢れと見る思想があった。これも、旧約聖書に由来する。人々は律法に従い、穢れているとされた者、特に重い皮膚病の者を共同体の外に隔離することで、穢れの感染から自分たちを守ろうとした。第三に、禍をサタンや悪霊に帰す思想があり、それは中間時代にペルシアから入ってきたものであった。福音書やその後のラビ文献には、悪霊の存在が当時実際信じられ、悪霊払いが行なわれていたことが記録されている。

また、人々の苦しみに対して神は何をしてくれるのかとの問いに対しては、当時、神の救いが政治的メシアによるイスラエルの独立、あるいは終末的刷新による神の支配の到来などという形で待望されていた。

こうした社会的思想的背景においてイエスは、病を癒し、悪霊を祓い、罪の赦しを宣言し、神の国の到来を告げ人々に立ち帰りを求めた。それは、神義論的には、当時のイスラエルの人々の考える応報思想や政治的、あるいは終末論的メシア思想が考える神の義の実現とは異なる仕方での神の義の実現を示し、目指すものであった。

イエスは、人々の苦難を神が与えた罪の罰と見る応報思想や、穢れや悪霊憑きを被っている人々を忌むべき救いから遠い者たちと

して忌避する考えに反対であった。むしろ神は人間の苦しみを自身の痛みとして感じるほどに人間を憐れむ。そして、その憐れみを持って、苦難の中にある人間を救おうとする。病の人々、貧しい人々、罪人と言われていた人々、悪霊に憑かれた人々は、当時、救いから遠い人々と見られることもあったが、それは誤りであり、むしろ他の人々よりも先に神に顧みられ、救われるのであるということ、イエスは示した。これは、苦難の根拠を何らかの罪の罰と見る禍の神義論の否定である。

彼は、苦難にあっていて人々が特別罪深かったから禍にあっていてわけではない、と言ったが、それは、彼らの罪深さの否定ではなく、逆に、誰もが神への立ち返りを必要とすると考えていたからである。病や禍の渦中にいる人々だけではなく、すべての人々が神への立ち帰りによって救われることを必要としている、と考えたからである。

イエスの神は、人の立ち帰りを助けるように、自ら人々を招き、憐れみによって、人間の側の立ち帰りに先んじて彼らを赦し和解を差し出す。そして、赦された人間、救われた人間が、自らが知った神の憐れみと、憐れみによる赦しや苦痛の軽減を受け入れ、赦されたことの意味、救われたことの意味を理解することによって、今度は、人間同士、互いに赦しや憐れみや助けを広めてゆくようになることを求めた。そうすることは、神に赦され救われたことへの必然的応答でもあり、必然であるがゆえに、赦しや救いを真に受け取ることの一部でもある。そうすることで人間は、神に倣う生き方に立ち帰り、そのことで、神の国を生きることが出来る。そのことによって、この世に存在する悪や苦難は克服されてゆくであろう。人間は神の救いの業に

参与することによって悪の問題への答えを受け取ることができるのである。

その結果実現するイエスの告げた神の国の到来は、多くの人々が考える神の国とは異なり、イスラエルの政治的独立と神政政治によるものではない。むしろ、人々が全人的救いに入れられるこの世における神の国の支配である。

この神の国の実現は、超自然的なレベルでも考えられた。イエスはそれをサタンの敗北と見る。イエスは、苦難の原因の一つを悪霊と見る見方を同時代の同胞と共有し、悪霊祓いを行なった。悪霊祓いは、イエスにとって、この世のサタンの支配を終わらせ神の国をこの世界に成就させるための宇宙論的意味も持っていたのである。

これらの点から、イエスは当時有力であった二つの神の国観、つまり、政治的メシアによる神政政治と、この世の終わりという意味での終末と新たな神の国の到来の二つの見方を否定し、この世での神の国の実現を考えていたと言える。この世での神の国の成就が、イスラエルの国家滅亡という民族的苦難の問題に対する彼の答えなのである。

イエスの悪に対する見方と態度は、禍の神義論に対しては赦しと恩寵の神義論と呼ぶことができ、また、「なぜ」と問う思弁的神義論に対しては、能動的な神義論と呼ぶことができよう。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10件)

本多峰子、マルコによる福音書における政治的、神義論の問いに対する答え、二松学舎大学国際政経学会『国際政経』、査読無、第19号、2013、45-62.

本多峰子、イエスの思想における<ファリサイ派の義にまさる義>の意味、『新約学研究』、査読有、第41号、2013、93-94.

本多峰子、新約聖書の死生観(金持ちとラザロの譬えを中心に)、日本聖書神学校キリスト教研究所『聖書と神学』、査読有、第25号、2013、1-19.

本多峰子、ルカ福音書 17:20-21 の解釈とくに he basileia theou entos hymon estin をめぐって、日本聖書学研究所『聖書学論集』、査読有、第45号、2013、185-208.

本多峰子、イエスの思想における<義>、『二松学舎大学国際政経論集』、査読無、第19号、2013、35-51.

本多峰子、イエスの真正な言葉の基準についての一考察、二松学舎大学国際政経学会『国際政経』、査読無、第18号、2012、45-62.

本多峰子、新約聖書の神義論 イエスの福音と宣教、日本聖書神学校キリスト教研究所『聖書と神学』、査読有、第24号、2012、23-84.

本多峰子、貧しい者への福音：貧困者の苦しみへのイエスの答え、『二松学舎大学国際政経論集』、査読無、第18号、2012、68-81.

本多峰子、この世を越えた報いとしての天国の概念の発達、二松学舎大学国際政経学会『国際政経』、査読無、第17号、2011、47-59.

本多峰子、イエスの譬えにおける「奴隷」の意味、日本聖書神学校キリスト教研究所『聖書と神学』、査読有、第23号、2011、1-26.

本多峰子、Jesus' Miracle of Healing: Forgiveness of Sin? 日本聖書学研究所 Annual of the Japanese Biblical Institute (AJBI)、査読有、Vol. 34-36 (2008-2010)、2011、5-28.

〔学会発表〕(計 4件)

本多峰子、マルコによる福音書の暗示的手法について、日本キリスト教文学会、2014年5月9日、広島女学院大学.

本多峰子、イエスと終末論、2012年12月17日、日本聖書学研究所、日本聖書神学校.

本多峰子、イエスの思想における<ファリサイ派の義にまさる義>の意味、日本新約学会、2012年9月7日、名古屋学院大学.

本多峰子、ルカ福音書 17:20-21 の解釈、とくに he basileia theou entos hymon estin をめぐって、2011年5月16日、日本聖書学研究所、日本聖書神学校.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

本多峰子 (HONDA, Mineko)

研究者番号 : 00229262

(2)研究分担者

なし

()

研究者番号 :

(3)連携研究者

()

研究者番号 :